

豊かさとJ.S. ミルの定常状態論

今日の地球環境問題は、個々の環境汚染や自然破壊の問題もさることながら、「人間社会における生活の質や豊かさとは何か」という根底的な問題の再検討を迫っているように見える。

無論、生活の質や豊かさをモノやカネだけで測ることはできない。それでも、一定の所得水準と物質的基礎が豊かさの実現に不可欠なことも明らかである。ところが重大なことに、現在の先進国が享受している物的生活水準は、果たして世界中の人々が同時に享受可能なものかと問われると、地球環境や地球資源の容量を考えると難しいと言わざるを得ないのである。

自動車を例に挙げよう。現在日本では、約7,700万台の自動車走っている。現在の日本と同じ対人口比率で中国において自動車が普及すれば、約8億台の自動車走ることになる。この数は、現在世界で走行している自動車の数に匹敵する。もう1つ世界ができるということである。もしこの8億台が現在のガソリン自動車として普及するならば、地球温暖化防止は絵に描いた餅にならざるを得ない。このことの意味するところは重大である。なぜならば、世界中が目標としてきた豊かさのモデル、具体的には先進国型生活様式を見直さざるを得ないからである。

先進国型生活様式の成立過程は、同時に人々の暮らしが自然から切り離されていく過程でもあった。途上国の人々には発展する権利があるが、それは現在のところ先進国で発展した技術の導入や生活様式の普及という形で進んでいる。

豊かさとは何かについて考える場合に忘れてならないのは、最後の古典派経済学者とよばれるJ.S.ミル（1806-73）である。労働時間と生活時間を区別することの必要性を経済学者として最初に説いたミルは、人間の生き方や精神生活にも深い関心を示していた。彼はリカードの利潤率に関する議論を受けて、経済成長プロセスは、利潤率が最低限にまで低下してしまった定常状態（stationary state）に至ると考えた。経済的には、定常状態とは、人的資本と物的資本のストックが一定量で不変な状態が毎

期反復することと定義された。資本ストック一定であるから、経済的には停止しているようなものであり、当時の経済学の常識からすれば、最も避けるべき事態ということになる。事実、日本においても、stationary stateは停止状態と訳されていた。

しかし、定常状態に関するミルの見方は他の論者と違っていた。ミルは主著『経済学原理』の中で、次のように述べている。「資本や人口が定常状態にあっても、それが人間の進歩向上をも停止状態に置くことを意味しないのは言うまでもない。あらゆる種類の精神的教養や道徳的社会的進歩の余地は従来と変わらず大いにあり、『生活の技術』を改善する余地も大きい。したがって、人間の心が経済的成功の術策に熱中することがなくなれば、一層向上するだろう」。つまり、定常状態にある社会をネガティブに捉えるのではなく、むしろ積極的に評価したところにミルの最大の特徴がある。

当時イギリス資本主義は「順調な」発展を遂げていた。にもかかわらず、ミルは、産業的進歩よりも真の豊かさや人間的進歩という広い視野から、経済成長や自由放任主義に対して批判的考察を加えていたのである。そして、定常状態では、人間の心が金銭の獲得や立身の方策のために奪われることがなくなるので、経済的進歩は停滞するかもしれないが、精神的文化的側面ではむしろ一層の進歩が実現するというのである。

J.S.ミルの考えた定常状態は、人的資本と物的資本の合計ストック量が一定という状態と定義されていた。しかし今日定常状態という場合には、人的資本と物的資本だけではなく、自然資本も加えて考えなければならないことは言うまでもない。ミルの問題提起は、私たちにあらためて豊かさとは何か、を考えさせる。そして、持続可能な社会へ向かうヒントがそこには隠されているかもしれない。現代に生きるミルは、人間が自然とのつきあいを取り戻すこと、そして自然の恵みに基礎を置く農林水産業の先進国における再生の必要性を示唆するように思えてならない。

(京都大学大学院経済学研究科，地球環境学堂

教授 植田和弘・うえたかずひろ)